

Ⅱ. 支援教育研究

- ・コロナ禍の中での学級におけるユニバーサルデザイン

天王小学校

- ・ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりをめざして

西河原小学校

- ・ICT の視点を持った学習支援へのアプローチ

東中学校

- ・インクルーシブ教育の充実・推進を目指して

天王中学校

- ・ユニバーサルデザインの新競技

彩都西中学校

コロナ禍の中での学級におけるユニバーサルデザイン

徳高 常喜

1 はじめに

本小学校は茨木市の南西部に位置し阪急電車や大阪モノレールの交通アクセスが便利のために転出、転入の児童が比較的多い校区である。そのために子どもたちの関係が希薄になっているところも見られる。児童数は2020年度より40名ほど増加し770名以上を数え増加傾向にある。

昨年度からの2年間支援教育協力校として研究をすすめることとなったが、研究をすすめる上で次のようなことに気づくこととなった。本来なら友だちのかかわりの中で、ともに学び成長すべき子どもたちであるが、友だちとの関係作りや、コミュニケーションを学ぶ機会を多く失うこととなった。今年度も新型コロナウイルスの影響での分散登校やグループ活動等が制限された中での学習だったが、そのような状況の中で支援を必要とする子どもたちも含めて互いに認め合い、ともに育ち合う集団をめざして一人ひとりの実態に合わせた教材や手立てを考えるべく支援教育協力校としてアドバイザーの助言を得ながらすすめることができた2年間だった。

2 視覚的に認識できる教材

2年間以上続く限定された活動の中で、発表など声を出して伝え合うことが制限されていたが、授業の中で声を出す機会を減らした中で子どもたちが交流できるように工夫した。アドバイザーからの助言を参考に視覚支援として、絵やイラストのカードを用意して、互いにカードを示すことで自分の考えをまわりの友だちに伝えられるようにしたことも取り入れた。言葉を発することが制限された中では、これらのカードが伝え合う為の有効なツールとなった。

また工夫のひとつとして、天王小学校では、視覚支援を中心にその方法を集めた支援サポートブックを作成している。サポートブックは学校生活を気持ちよく送るための「生活編」、学習する力の基本を築きあげる「学習編」の2部構成で全33ページにわたって記載されている。このサポートブックは児童に対してはもちろんのこと新転任の教職員に対しての天王小学校のルールや支援方法についての研修に活用され、その結果として教室での学級経営、授業作りの一助となっている。

この冊子は毎年見直され改訂がおこなわれているので、昨年度に続きアドバイザーからのアドバイスによって改善点が明確化し、生かされることとなった。

3 講話「授業のユニバーサルデザインの基本」

今年度の講話は、緊急事態宣言発出等により2度の延期となり実施は3学期に予定されることとなったが、残念ながら全国的な感染者増加の為に開催することはできなかった。昨年度の講話では、アドバイザーより学びやすく安心できるという子どもの目線からの講話があり、余分な視覚的刺激的調整、見通しを持ちやすい情報提供の視点から教

室環境についてのアドバイスもあった。また、自閉症児をみすえての対応として子どもの気持ちを一旦受け止めること、ほめ方のポイントについて具体例を交えて聞くことができた。さらに、指示の明確化、分かりやすい指示の出し方についても話があり講話を通して学校全体での取り組みの方向性を示していただいた。

4 巡回相談

アドバイザーからの2年間通した助言として、子どもをほめる大切さ、子どもをほめる授業の展開、授業のねらいを持つことを考えるなど具体的に言葉をかみ砕いてわかりやすく説明していただいた。

5 ユニバーサルデザインを取り入れた研究授業

今年度は、研究授業の予定日に緊急事態宣言発出され研究授業の実施が困難な状況となった。しかし、昨年度は、アドバイザーより多くの助言を受けた。「授業の流れを示す」「具体物の用意」「既習事項の確認」「わかりやすい板書」「簡潔な指示」「内容を詰め込まない」「個人活動」「ペア活動、グループ活動」以上の視点から具体的なアドバイスをいただき授業づくりの助けとなった。

上記の助言より、授業の構造化を図り「学習流れ」を組み立てることで、学習の進み具合を掲示し視覚から確認できるようにした。さらに、ヒントカードの用意、導入時に既習事項の確認、指示の簡潔化、活動する形態を提示、話すときの声のトーン、分らないときに聞きやすくする、板書や授業内容の精査、ペア活動等授業の中で大切にしたいユニバーサルデザインを取り入れた。

昨年度も研究授業前日に大阪府に緊急事態宣言が発令され、多くの教職員は教室ではなくズームにより別室で授業参観がなされた。さらに、授業内容も学び合う活動が制限された。

研究討議会はアドバイザーから授業で良かった点、改善点を具体的に助言していただき全体で共有することができた。また、2つの事項を相対的に教えていく方法、コンパスの指導方法等、授業の細部にわたってのアドバイスがあった。

学習の流れ	
①	めあて
②	もんだい
③	見通し
④	交流
⑤	練習
⑥	まとめ
⑦	ふりかえり

6 2年間の研究校として

今年度も、多くの制限がかかり「給食は楽しく会話をしながら」から「前を向いたまま無言で食べる」、「友だちを大きな声で応援する」から「大きな声を出さない」等々ここに書けないほどたくさん常識が非常識へと変化した。これらのことを受け入ることや順応することが難しい子どもたちをたくさん見た。新聞等で登校しづらい子どもたちが激増していることも報道されている。この2年間のコロナ禍の中で学校生活を送ることとなった子どもたちが、友だちとの関わりが疎遠なまま成長していくことへの将来不安を感じずにはおれない。しかし、支援教育協力校としてアドバイザーから受けた助言が子ども達の助けになった。また、マスク越しではなく、声を出し合って励まし合い、伝え合い、教え合い、喜びを分かち合うことが、どの子にとっても最も大切なことの要素であると、あらためて学ぶことができた2年間だった。

ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりをめざして

寺本 満里

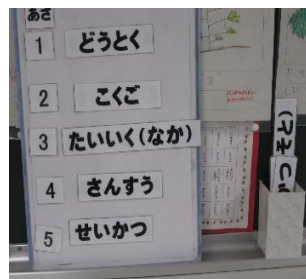
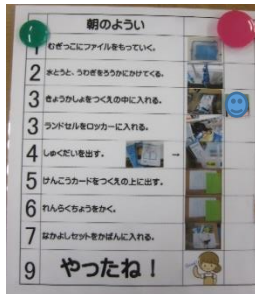
1. はじめに

本校は、児童数185名と小規模な学校である。1年～6年生はそれぞれ1クラスである。支援教育協力校として2年目。「どの子どももわかる楽しい授業づくり」を支援教育の目標として取り組んできた。特別支援教育アドバイザーの森田安徳先生より、子ども理解を深め、児童実態を共通理解して楽しくワクワクする授業づくりをご助言いただいた。今年度、一斉授業の中での「やる気を高める」指導方法や教材などユニバーサルデザインの授業づくりに取り組んできた。

2. 取り組み

(1)教室のユニバーサルデザインの環境を整える

子どもが使いやすい教室は、先生も使いやすい。全学年で教室を統一して行う。使いやすい教室に変えていこうと、年度初めに掲示物や教室の環境を提案した。一日の流れ・授業がわかるように掲示する。掲示物は基本的には後ろ。机・イス(机用カードの4分の1位のサイズ)に名前を貼る。黒板横の掲示板にカーテンをつける。黒板はできるだけすっきりさせる。ICT機器を配備する。テレビ下にカーテンをつける。体操服、体育館シューズなど持ち物を入れる場合は、段ボールロッカーに入れる。机の横には何もかけない。水筒は廊下のフックにかける。机の位置に印をつける等)



(2)誰もが学びやすい授業で安心できるクラスにすること

校内研修会『発達しょうがいや特性に応じた適切な支援方法・指導方法』で森田安徳先生から「教員は、子どものしょうがいに気づいてあげる。家庭では、わが子を家庭でしか見ることが出来ない。しかし、学校では、いろいろな体験や経験で、たくさんの友達と接することが出来るので、できる程度や速さなどその子の困り感・苦手なところ・支援が必要なところを見つけやすい場である。教員が「この子しんどいなあ」、「大変やなあ」と思うことは、子ども自身も困っていること。その子が何に困っているかを気づいてあげて、その子にあった支援方法を考える。」ように指導いただいた。

そして、支援教育のめざす目標として3つの取り組みをすすめていった。

- ①子どもの自信につなげるために、ほめる仕掛けを作り、具体的にほめる。
- ②具体的に指示を出そう。
- ③非言語的授業行動を意識して授業をしよう。

(3) 研究授業 1年 図工「クレヨンやパスとなかよくなるう」

「こすってうつそう」～でこ・ぼこ・ざらたんけんたい～

本時の目標は、こすり出した模様の面白さ、美しさ、不思議な感じに気づき、写す。模様を組み合わせたり色を変えたりして試しながら、写し方を工夫する。できた作品を見せ合い、互いのよさに気づく。提示の仕方を工夫する事から取り組んだ。クイズ形式でどの子にも興味を持たせる導入にした。



T 「これは、何でしょう？」
C 「〇〇です。」
T 「ほんとうに～？」(教師が答えを言う✕)
T 「あ！正解だね。」



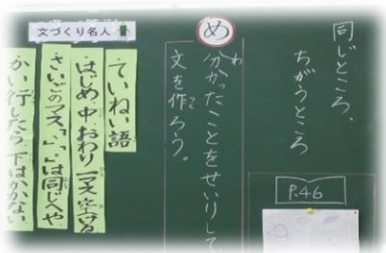
モデルを示せば、じぶんで やってみようと思う



(4) 巡回相談 2年国語 「同じところ、ちがうところ」

～わかったことをせいりして、文を作ろう～

学習面や生活面で保護者からも相談を伺った児童の観察を行った。観察に際して取り組んだ授業の中にも、「やる気を高める」工夫づくりをしていった。また、授業後、支援が必要な児童への有効な方法として①短時間で区切る。(15分は長い)②事前に指示をする。(注意等)③他の子が聞いても「なるほど～」となるように説明してかえす。④難しい言葉は簡単な言葉で説明をする。⑤行動・動作を言葉やモデルで表す。また、姿勢がくずれがちな児童への手立て、本人を取り巻く環境の中で教員が考慮すべきこと等アドバイスを頂き、支援方法を共通認識することができた。



3. おわりに

2年間の支援教育研究校の取り組みで、教員の支援教育に対して意識に良い変化が見られた。子ども理解が大事であり、児童のイメージをふくらませ、児童の特性をつかむ。どういう理由で困っているのか早くできる方法を見つけていく。声かけのしかたが、その子にあっているか、視覚支援教材の工夫や教室環境の統一をする。今後も学校全体で一人ひとりの児童に寄り添いだれもが安心して過ごせるための支援体制づくりを行なっていきたい。

ICT の視点を持った学習支援へのアプローチ

坂東 宗太郎

1 はじめに

今年度より、一人一台タブレットが導入され、様々な学習の場面で使用されている。本校でも、タブレットを使用した学習を各教科の学習において、試行錯誤しながら取り組んでいる。そんな中で、支援を必要とする生徒たちへのアプローチの方法も多様化していくと考えられる。

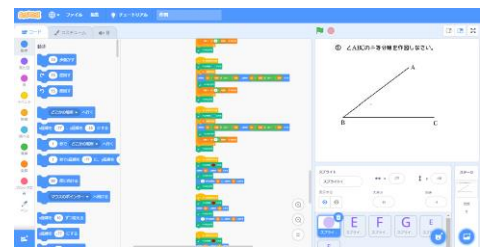
本校は、各学年 5 クラスの 15 学級の中規模校である。うち、支援学級（以後つくし）在籍は 27 名 5 学級、えるクラブ（言葉の教室、通級指導教室）在籍は 21 名で、それぞれに様々な課題を抱えながら学校生活を送っている。特にこのコロナ渦においては、Microsoft teams を使用したオンライン授業も行われる中、支援を要する生徒への対応も様々で、指導側の ICT 機器への理解が求められる場面も多かった。これらの指導の中で、様々な効果が見られた。

2 取り組み

(1) つくしでの取り組み

つくしに在籍している車いすを使用する全介助生 A は、タブレット導入以前は、普段の板書や書き込みに関してはすべて介助者が代筆し、自分で発言したり、班の中で発表をしたりする場面では、介助者が代読し伝えるという形で学習を行っていた。また、感想文や振り返りといった長く文章を書く場面では、時間内で書ききることができずに家に持ち帰り、家で代筆又は家庭の PC から印刷して提出するという行っていた。

一人一台タブレットの導入によって、彼の学習環境に変化が起こった。板書や書き込みに関しては、可能な限り自分で Excel や Word を使用して打ち込みを行い、それらの提出に関しても、作成したシートを teams で提出できるようになった。特に数学の作図問題など、今まで本人が出来なかった問題に関しても、scratch を使用すれば、本人が手で書くイメージで解答することができるようになった。また、定期テストも Excel の解答用紙のデータに自分で打ち込むことができるようになったため、解答にかかる時間の短縮にもつながった。中でも特に変化が大きかったのは、総合的な学習や学活の時間に行われる班活動だった。今までは、班で発表を行う場面等、資料作成の時には彼の意思や意見を確認するために必ず介助者が横に寄り添い、班の仲間に介助者が伝えていた。ところが、teams 上で PowerPoint や Word を作成するようになったことで、自分の意思や意見を直接反映させることができるようになり、彼自身が自ら積極的に取り組む姿が見られた。



(2) えるクラブでの取り組み

小学校まで支援学級に在籍し、中学校入学時点でえるクラブへの入級を決めた B は、委員会にも積極的に参加するなど前向きなところがある反面、学習面に課題があり、な

なかなか勉強に向き合えないでいた。その中で、1学期末の社会のテストで、自分が想像していたよりも点数が取れなかったとき、えるクラブで行われた振り返りに、「次は点を取りたい」と書いた。

そこで、社会の重要語句を覚えることを目標としたが、なかなか一人ではどこから手を付けてよいかわからず、自分の思いとは裏腹に、なかなか学習に取り組めない日々が続いた。そこで、通級指導教室の中で Microsoft teams を使用することを本人に提案した。そして、同じえるクラブの生徒の中で、社会が得意な生徒や、B と面識があり、めんどろみのよい生徒とともに、Word ファイルを共有し作成したもので、必ず出る語句の学習を行った。また、それをプリントアウトして、本人が書いて覚えるような工夫を行った。それぞれクラスも小学校も違ったメンバーだったが、B はそのみんなが手伝ってくれているという思いからか、いつも以上に頑張ることができた。その結果、今までで

13	ヒンドウ教	ヒンドウきよ	主にインド人が信仰
14	ガンジス川		インドの川、ヒンドウ教の聖地
15	BRICS	ブリックス	工業先進の5か国(ブラジル、ロシア、インド、南アフリカ)
16	インダス川		パキスタン、インドの大河、インダス文明が形成
17	スリジャヤワルダナプラコッタ		スリランカの首都
18	北京	ペキン	中国の首都
19	メッカ		イスラム教の聖地
20	白河上皇	しらかわじょうこう	白河天皇の進化した姿(位)
21	院政	いんせい	天皇に代わって上皇が行なう政治

最も高い点数を取ることができ、その後えるクラブで行ったテストの振り返りに、「えるクラブでやっているところがあった」「ほかのところも埋めれるようにしたい」と自分から勉強に前向きに取り組む姿勢が見られた。

	テスト中の様子	満足度	次回注意点 実行すること
社会	おちついてできた。 あわてることがあった。 落ち着いてできなかった。	50	ほかのところも埋めれるようにしたい。 ↓ テストにおちついてつづける。 ↓ 書いて覚える回数を増やす。
	時間配分 足りない ちょうどよい。 ずいぶんあまった。	理由 ・えるクラブでやっているところかかけこいたがる。	

(3) 取り組みのまとめ

これら2つの取り組みからわかることは、ICT を支援に取り入れることで、新たな学びが生まれる可能性があるということだ。今回の取り組み以外にも、タブレットを使った授業を行っている。決してその取り組みすべてで結果がでたわけではないが、ICT を使用することで、今までの学習環境にはなかった生徒の学びを見ることができ、有用性を実感している。

3 おわりに

冒頭にも書いた通り、今年度より一人一台タブレットが導入され、様々な学習の場面で使用されている。これは、通常学級だけでなく、支援学級や通級指導教室でも使用されている。しかし、特に支援を要する生徒への実用はまだできていないのも事実である。それは、通信環境の把握の部分であったり、生徒へのフォローアップ体制であったりと原因はさまざまであり一朝一夕でどうにかなるものではない。今後、より実用化していくためには、学校ごとの取り組みで終わらせるのではなく、今回のように、情報共有をしていくことが生徒たちへのより良い支援に繋がっていくと考える。

インクルーシブ教育の充実・推進を目指して

中川 葵

I. はじめに

社会情勢の急激な変化に伴い、支援教育に対する理解が深まっている。しかし、支援学級入級による抽出授業のことや、公立高校入試の評定の扱いなど入試のことにのみ注視し、生徒本人の状況に応じた選択ができていないように感じる場面が増えている現状がある。それは、言い換えると生徒本人の困り感に応じた理に適ったサポートが第一義的に考えられていないということである。また校内では「例年通りの授業では生徒の理解が難しい。個々への対応が多すぎて授業が進まない」との声も上がり、生徒本人に目を向けると、本人の困り感はさらに増し、その困り感が周りの生徒へ影響している現状があり、対応に苦慮する場面が増えている。

学習指導要領の解説にも「通常学級にも、障がいのある生徒のみならず教育上特別の支援を必要とする生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教職員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解することが不可欠である」との記載があることから、学校全体で支援の観点を持って教室づくり・授業づくりなど、学ぶ環境を整えて、インクルーシブ教育の充実・推進を目指すことが、教員・生徒の互いにとって最重要であると感じ、今年度から支援教育研究協力校として研究を進めることになった。

II. 取り組み

校内の課題としては支援教育に対する差異が挙げられ、指導・支援・配慮の混同が見られる現状がある。例えば教師や生徒サポーターがすべてを「代わりにやってしまう」ことで本来であれば、本人ができることすらも奪ってしまっているということがある。今年度は発達上の特性が顕著にみられる生徒 1 人に焦点をあて研究を進めた。

(1) 対象者について

対象者Aは小学校時代から発達に課題があると、学校から母に対してアプローチはあったようだ。しかし支援学級も発達相談もかかったことはなく周りのサポートがあって何とか 6 年生までくることができたようだ。新年度がスタートしてすぐにAの発達上の特性が顕著に現れ、周囲の生徒や教員から不安の声が上がった。Aが小学校の時にどのようにすごしていたのか、どんな声掛けやどんな仲間がAを支えてAは学校生活を過ごすことができたのか。学校・友人・教員などAを取り巻く環境は大きく変化したため、Aが通常学級で過ごすための手だてを見つける必要があった。

(2) 伊丹教授による巡回相談

梅花大学の伊丹昌一教授に授業中の生徒の様子を観察していただき、Aの特性とそれに対するサポート法をアドバイスいただいた。Aは落ち着きや集中力が無く、自分のペースが崩れる（予定変更がある）場合に出奔してしまうことが多々あり、また自分が納得するまでは何も行動に移すことができないことがあった。見通しが立てばパニックになることも減り安心できるとのことで、取り組みをいくつか実践していった。



Figure ①

① 当日の予定を常に見える所に

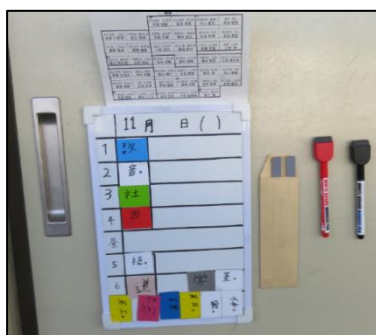


Figure ②

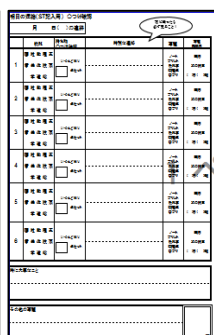


Figure ③

ホワイトボードに 1 日の行動を自分で記入することで他の生徒に頼ることなく移動教室に行けるようになった (Figure ②)。

また、スケジュールの把握のために通級指導教室えるクラブで使用されている連絡ノートを参考にして、Aに合わせて中身を変更し活用している (Figure ③)。この予定表も毎STで記入し、保護者確認もできるように常にカバンに付けるようになった。学級内でも連絡ノートを忘れた生徒用に準備され、活用されている。

②座席は廊下側一番後ろに

教員の目の届く、声掛けのしやすいところ。という理由で最前席であったが、全体の様子を見て何をすべきかを自分で判断し取り組めるようにするために一番後ろの席にした。後ろを向いて私語をすることもなくなり、他の生徒への授業妨害がなくなった。



③モデリングを班員に

まずは学級担任が声掛けの方法等の関わり方を見せ、見本となるモデリング生徒が関わり方を学ぶ。それがどんどん広がり、互いにサポートし合える学級集団を目指した。Aが心地よく、素直に言うことを聞けて注意や褒めることもうまくできる生徒を班員にした。モデリング生徒の真似をして取り組むことで、授業の進度についていくことが難しくても、目標ができたことで落ち着いて授業参加ができるようになった。

④個々の能力に合わせた評価

取り組み全てに×を付けられると学習性無力感が増し、「自分はできない人間だ」と判断してしまう。それにより、本来ならば“努力できるもの”に対しても「どうせできない」と思い込んで何もなくなり、さらには他者の目にも怠惰に映ってしまうという悪循環に陥るようだ。そのためAのように、みんなが1分でできることを何10分もかけてやっとできるという生徒には時間内にできたものだけで評価してあげるといいとのアドバイスをいただいた。例えば5問中1問しかできていなかった場合でも時間をかけて頑張ったことや、ここまでは頑張ったよ。ということをも本人に記入させるようにした。それにより自己理解にもつながっていった。

以上のような取り組み例の他に、教室内のユニバーサルデザインとして

- 1) 教室・黒板回り、両サイドの掲示板にも何も置かない・掲示しない (Figure ①)
- 2) リュック・教科ファイルBOX(1年全体の取り組み)は後ろ (Figure ④)
- 3) 机にかけている体育館シューズは右側に統一 (Figure ④)

動作の妨げになるものや、余分な視覚的刺激を減らすことで何に注目すべきかがわかり、Aを含む特性のある生徒が落ち着きをもって学習空間にいることができるようになった。結果、周囲も落ち着き学習ができるようになっていく。



Figure ④

(3) 情報共有

伊丹教授からいただいたアドバイスや特性ごとの対応法については支援教育だよりを発行し、校内で共有・実践に移せるように努めた。取り組みに対しての成果はまだではあるが、Aに関しては巡回ごとに保護者との連携を図り、情報共有をしたため、これまでと取り巻く環境は大きく変化していると感じる。

Ⅲ. 取り組みの現状と今後の課題

Aの状況が年度初めよりも改善傾向にあることは取り組みの成果である。上記の取り組みについて、Aだけではなくできるだけ同じものをクラスの生徒と共有して利用していることで、全員が同じ立場・目線に立って物事に取り組んでいる。そのため、『Aがやってるから…』というクラスの生徒からの拒否感を感じられない。しかし、クラスの生徒がAに対して、Aの代わりになって物事をやりすぎてしまっていることについては、課題が残っている。『その行動は本当にAのためになるのか?』等、関わり方については、話をしながら進める必要がある。支援の必要な生徒という意識ではなく、困っている仲間が教室にいる際には、互いが互いにサポートし合う関係づくりをしていきたい。

これからは保護者と協力すると同時に、大人の役割分担も明らかになると対応がより柔軟にできると考えられる。また、この成功事例だけではなく、教員一人ひとりが支援教育の視点を持つことにより、物事を多面的に見ることができると考えられる。そのため、対象生徒だけではなく集団全体を見渡しながら、その場に応じた個別に対する粘り強い声掛けや仕掛けが必要になる。校内全体でチームとして支援を主とした学校運営を行い、一人ひとりの生徒の成長を支援していきたい。

ユニバーサルデザインの新競技

三角 昭太

1 はじめに

彩都西中学校は今年度から支援教育研究協力校となった。研究テーマは「学ぶ内容より学び方につまずく生徒」。学習内容を理解する力はあるが学習方法や学習環境によって苦戦する生徒のことだ。今年度はそんな生徒への適切な個別支援について理解を深めたいと考えていたが、梅花女子大学 伊丹昌一教授の助言に影響されて方針を変えた。

2 伊丹教授の助言

巡回相談後のケース検討会で本校の教員から伊丹教授に相談があった。「授業に気持ちが向かず、教員から指示があったことをやらない（やれない）生徒がいる。周囲もその生徒のことをある程度は理解しているが、いつか『どうしてあの子だけ許されるの』と不満を抱くのではないか」という内容だった。

これに対して伊丹教授は「周りの生徒に向けて『先生は一人ひとりのやりやすさ・やりにくさを知っているから今は認める』と説明をすればいい。それと同時にその生徒だけが助けてもらえていると思わせず、困っている生徒がいれば誰でも助けてもらえることを理解させてください」と答えた。

このようなケースだと「その子に対する個別の対応への理解を周囲に促す」という方向性の解決策を考えがちではないだろうか。しかし伊丹教授の回答は個に焦点を当てるのではなく全体の枠を広げることによって問題を解決する方法だった。それを聞いて、学校における大抵の問題は個別の対応をとる前に全体の調整をすることによって解決できるのではないかと考えた。これをきっかけに研究協力校としても「つまずく生徒への個別支援」ではなく「つまずく生徒を出さないための全体支援」について理解を深める取り組みをすることに決めた。

3 つまずく生徒を出さないための全体支援

今年度の締めくくりとなる1月の研究授業では『彩都の先生が実践している学びやすさのための授業術』という冊子を作った。これは本校の教員が授業において実践している、生徒の学びやすさ（見やすい・聞きやすい・話しやすい・やりやすい等）のための工夫を全教員分まとめたものだ。多くの教員が取り入れる定番の手法から、目から鱗が落ちる独自性のあるアイデアまで、生徒の学びやすさに繋がるたくさんのノウハウを教員間で共有することができた。さらに全クラスの授業を視察した伊丹教授から各授業者が無意識に行なっていた細かな授業テクニックについて解説していただき、知見を広げることができた。次の日から他の教員の実践を自分の授業に取り入れる教員の姿が複数見られた。学びやすさに配慮し、つまずく生徒を出さないことを予め心がけた「ユニバーサルデザインの授業づくり」への意識の高まりを感じられた。

そんな今年度の取り組みを象徴する「ユニバーサルデザインで設計された体育大会の新競技」を紹介したい。体育科と支援担が共同で考え、校種や年齢を問わずプレーできる競技に仕上がった。

4 ユニバーサルデザインの新競技

この競技は障がいのある生徒のために特別ルールを設けるようなことはせず、全ての生徒が同じルールで参加できることを前提に作った。それを実現するため「競技方法がわかりやすいこと」「身体接触等の危険性がないこと」「各自がプレーの仕方を選択できること」に配慮した。その3点について具体的に説明する。

(1) 競技方法がわかりやすいこと

手順①「スタンバイ」		手順②「捕りにいく」	
投げる役 👤👤	捕る役 👤👤	投げる役 👤👤	捕る役 👤👤≡
手順③「投げる・捕る」		手順④「戻る」	
投げる役 👤 ≡ 👤👤👤	捕る役 👤👤	投げる役 👤	捕る役 ≡ 👤👤

二人一組で「投げる役」と「捕る役」に分かれる。一方が投げた球をもう一方が取手付きのザルでキャッチし、次のペアへバトンタッチ。最も早く全てのペアがキャッチを成功させたクラスが勝ちとなる。一度見ればすぐに理解できるほどシンプルな競技方法で、どう動けばよいか分からず困る生徒は初回の練習からい

なかった。(図の通り。手順④の後は次のペアが同じザルと別の球を使って手順①から再開する)

(2) 身体接触等の危険性がないこと

感染症対策も意識したため、生徒同士の距離が近くなる場面はほぼない。動線も決まっており、同時に動く人数も少ないため、小柄な生徒や動きがゆっくりな生徒も安全に参加できる。車いすや松葉杖を使用する生徒も同じルールで参加できた。

(3) 各自がプレーの仕方を選択できること

例えば一般的なリレーの場合、走るのが苦手な生徒も参加する以上は走ることを避けられない。しかしこの競技は二つの役割から好きな方を選べるので自分の苦手なことを避けられる。障がい等の理由によってどうしても困難な動きがある場合も同様に解決可能だ。それでもなお難しい場合を想定して「キャッチのためにどれだけ近づいてもよい」というルールになっている。つまり球を手渡しできる位置まで近づいても構わないのだ。近づいた分だけバトンタッチのために戻る距離は長くなるのだが、それでも往復 50m 程度なので時間がかかっても大きな遅れにはならない。二つの役割と自由に調整できる難易度、これがユニバーサルデザインにつながった。

非常に簡単な競技だが、簡単すぎてつまらないものにはなっていないこともこの競技の魅力だ。二人の距離を自由に決められるルールを逆手に取り、一切近づかずに遠投からキャッチを狙うペアもいた。投げる役に近づく時間とバトンタッチに戻る時間がかからない分、成功すれば他のチームに差をつけることができる。運動が得意なペアは積極的にこれを狙い、ファインプレーを決めて競技を盛り上げた。また、難しいことを狙うと当然ミスも起こるので苦手な子のミスも目立たなくなった。易しさと楽しさの共存が実現できた。

文字数の都合でここに書けなかったルールもいくつかあるが、それらもユニバーサルデザインで作られており、なおかつゲーム性を高めるものになっている。

書面では分かりにくいと思うので、もし興味があれば詳しくお伝えします。必要なら学校の実態に合わせてアレンジもします。一緒に良いものを作りましょう。